還魂紙料

春城自題

特別
イ4
1919
961

是ハ余が青年時代友に寄せし書簡也
事四十数年前の舊に属し全く記臆
に存せず偶々成文堂主人に示され一讀恍
として夢の如し當時國會開設の檄
運漸く動き余亦感ずる所ありて政黨
論一篇を公刊して世に問ふ此書簡ハ
乃ち其刊本を郷友に寄せたる際の添
状也文も書も共に稚拙にして慙汗

14
1919
961

を蔵まんとて表示されたるこの帖
裂て遊魂紙料と為すに忍びざ
るを奉贈せん武文堂主人切に
一語を題せんことを請ふ乃ち詩
懐を叙して之れを還す

昭和四年六月中浣
芝田書舎に於て
七十叟 春城

市嶋謙吉ハ與ニ謙吉ハ同ク生ヲ水原ノ郷ニ稟ケ得友知音ヲ水原ノ郷
ニ贈ス謙吉ヤ水原ニ恩誼ヲ借ルヤ実ニ多シト云フヘシ而シテ一朝負笈郷
莫ヲ辞シテヨリ千里十萬裏山音水信絶テ通スルコトナリ住ハ僅ニ
百里ヲ隔ツト雖モ其状恰モ胡越啻ナラサルカ如キモノアリト曩ニ全
豈ニ感情ナカランヤ謙吉ヤ　替ハ日ニ水原ニ縁ムカサルハアラサルナリ相
思フ情ハ分離ト逢フテ益ス察ス懐旧ノ念ハ故人ニ會シテ愈切ナリ
謙吉ハ東西轉蓬ノ身トナリテヨリ朝ニハ暁鐘ヲ聴キ覚メテ旅魂ヲ
悩シ夕ニハ帰アノ意味ヲ唱テ御恩ヲ促ス偶ニ学派ヲ偸ニ家
山ヲ省ハコアリト曩ニ概子カ廿ノ白子ヲシテ親リ謦欬ニ接シ幸志
ヲ伸フルノ機会ナキヲ憾ム今秋幸ニシテ復故郷ヲ叩リヨ溥話氏

ニ邂逅シテ久濶ノ疎情ヲ解リテ得運去悦ビ何ソ之ニ如ン哉ラハ
足ヲ腹上ニ加ヘ満腔ヲ吐露シテ議論ヲ上下スルアランコヲ要ルニ
座上曾テ左右方ニ奔走シテ閑話縦議スルニ至ラス仍リテ思フニ
良秋ヲトシ親睦宴ヲ開キ一夕ノ相歓ヲ尽メ宿情ヲ慰セン
ト輙チ不穏政党論ヲ諸氏ノ高議ニ付シ敢テ鑿心ニ備サ
ントセルニ又意ノ如クナルヲ得ス遂ニ諸氏ニ袂別スルニ及フ進去ヤ遺
憾亦極矣然レモ人事毎々ノ際止ムヲ得サルヲ以テ断然復タ
征途ニ就リ於テ別稿ヲ留メテ諸氏座右ニ呈ス書中言フ所ノ
如キ自ラ愚衷ヲ尽シテ復タ餘蘊ナシト信スルヲ以テ爰ニ
多言セス若夫其ノ論理ヲ以テ之ヲ我今日ニ適用スルノ詳

細ノ如キ進去意見アリト雖モ之ヲ辯スルニ遑アラス只タ諸氏ニ
贈ルニ該稿ヲ以テスル所以アリ今ヤ立憲ノ政論我邦ニ旺ニ其
政体亦將サニ起ラントス其起ル所ノ日ニアルヤ八断定スヘカラスト
雖モ早晩之ニ備ヘスンバアラサルハ夫レ明ナリ之ニ備フルニハ政党ノ
組成ヲ以テ最大急務トス是レ今日政党ノ論亦タ従テ起ル
所以ニシテ進去カ亦タ鄙見ヲ執リ論ニ陳フ所ナリ然レモ政党ノ事決
シテ容易ノ談ニアラサル也之ヲ主張スルモノニシテ緊要ノ政策ナルヲ
確信セス或ハ政府ノ権ヲ殺リヲ是レ務メ或ハ激烈ノ政変ヲ意
トセサルモノアリ之ヲ毀スル者アリ軋轢ノ貧困ニ陥キモノアリ人文ノ
権利為ニ毀損セラルヽニ憲ナキモノアリ英雄ノ器械トナルヲ忌ム

テ之ヲ避ルヲ欲ラサル者アリ而シテ却テ之ヲ地方議会等ニ使用セントシ
事物ノ耳霰ニ刷アルヲ感セサル者アリ況ンヤ政党ノ起リテヨリ衰フ
ルニ至ル迄其ノ経歴スル状況之ニ應スルノ方策ノ如キハ一モ之ヲ観
サルニノ漏ト皆是ナリ蓋シ六ノ極論固ヨリ此ノ缺ヲ補フニ足ラスト雖
ヒ世上未タ之ヲ論シテ全キヲ得ルモノヲ見サルヲ以テ敢テ該氏ノ為
メニ執筆ノ労ヲ辞マサリシナリ聞リ諸氏亦タ頃年来政談法
社ノ挙アリト憶フニ人民墨守ノ旧習ヲ破リテ進取ノ気力
ヲ提撕シ上ハ皇室ヲ泰山ノ安キニ置キ下ハ民権ヲ不窮ニ保
テ国威ヲ振張セントノ旨意ニ外ナラサル可シ其議論方法
ニ至テハ千差万別ナラント雖ヒ其目的ヤ公明ナリ其事業

ヤ正大ナリ況ンヤ今ヤ我邦亦タ平穏改革ノ政変ニ遭逢セント
スル機会アリ必スヤ憲法確立シテ上下ノ分ヲ正シ政事ノ権
衡ヲ維持シ強国ノ基ヲ立テサルヘカラス諸氏ノ挙ヤ實ニ賛ス
ヘキナリ蓋シ六遠ク他邦ニ客居スルト雖ヒ自欣喜措カス恐ラ
クハ諸氏ト共ニ協賛スルノ業ニ與ラサルヲ是レ遺憾ヲ顧ミス
該氏為ニ一ノ裨補ヲ期スル所以ナリ該氏請フ諒セヨ政談ノ事
タル実ニ至難ナリ政党ノ組成ノ如キモ亦顧後慮之ニ従事
セサルヘカラス諸氏モ希クハ其今日ニ欠ク可ラサルヲ諒シ其利ヲ収
メテ其弊ニ陥ラサランコトヲ蓋シ六国ヲ愛国ノ念ニ於テ偏スル
所ナシト雖ヒ亦タ郷里ノ友ノ国事ニ名ヲ得ルニ於テ私情欣フ忘

擧能ハス嗚呼越ノ山ハ欝トシテ如此ク蒼タリ信水ハ滔々トシテ
如此其深シ況ンヤ渺茫天際一望北海岸ニアリ英氣
ノ充ル所ヲ寧ロ猶ホ旧ニ泥ミ切ニ沈ミ郷黨相守リ藩閥
相軋リテ却テ鞭ヲ他人ニ著ケラルヽコトアル豈ニ痛歎ニ堪
フ可ケンヤ諸氏固ヨリ之ニ見ルアラン義心金ヲ礫スノ鉄腸
ヲ以テ公明正大國家ノ為メニ謀ルニ於テ僅ニ云カ愚案一辭
ノ補助ニモナラバ大ニシテハ國家ノ為メ小ニシテハ私情ニ於テ悦
止能ハサル者アルナリ

明治十四年九月廿二日夜於新作客舎草之

市嶋謙吉再拝

原令造殿
安孫子石太郎殿
羽田文造殿
星直哉殿